主論文要旨

本論文の目的は、(1)の 2 つである。

(1)　a. 個別言語の個々の音韻現象の一般化を示すこと。

b. 統語論のあと（post-syntax）で起こる音韻現象が、どのような音韻領域で起こるかということに関して、タイポロジーを示すこと。

ここで言う「音韻領域」とは、「当該の音韻現象が起こる領域」という意味である。それは、「疑問詞から、それを c-command する補文化辞まで」といった比較的広い領域であることもあるし、「動詞語幹のあと」や、「母音 i の前」といった、比較的狭い領域であることもある。

以下、本論文の内容を、章を追って述べる。

本論文の第 2 章は、福岡方言と釜山方言が、疑問詞疑問文の音調に関して、非常に類似していることを示す。しかしこれは、両方言が系統的に親縁関係にあることを主張するものではない。ある種の地域特徴なのかもしれないし、「言語」だから似ているということなのかもしれない。具体的には、下の (2)(a, b) のように、ダレ、ナニなど（に相当する）疑問詞から始まって、それを c-command する補文化辞（Ø（音形ゼロ）、カ、モなど（に相当するもの））までが、1 つの音韻句（minor phrase）となり、高く平らなピッチが続く、という現象である。疑問詞がなければ、下の (2)(c) のように、普通に基底のアクセントが現われる。

(2)　a. （[ダレガ　キョネン　キョート　イッタ Ø]）↑

＜誰が去年京都行った？＞（すべて高いピッチ）

b.（[ダレガ　キョネン　キョート　イッタ1カ]）（ワスレ1タ）

＜誰が去年京都行ったか忘れた＞　（1カでピッチが下がる）

c. [（キョ1ネン）（キョ1ート）（イッタ1カ）（ド1ーカ）])

（ワスレ1タ）　（基底のアクセント1が現われる）

＜去年京都行ったかどうか忘れた＞

↑: 上昇イントネーション。
1: アクセント（下がり目）。名詞には基底形で指定されている。
動詞には、無標アクセント付与規則で付与される。
[　]: 節境界。
(　): 音韻句（アクセント句）境界。

疑問詞と補文化辞がどんなに遠く離れていても、この現象は起こる（途中で息継ぎが必要であれば、ポーズを入れることは可能だが、それは文法の問題ではない）。この現象を一般化するために、本論文では、統語論のあとに働く規則として、(3) を提案する。

(3)　音韻句形成規則: 疑問詞から、それを c-command する補文化辞までを、1 つの音韻句（minor phrase）とせよ。

実際には、下の(4)のような埋め込み文がある構造では、c-command だけでは十分でない。Q1 は WH1 も WH2 も c-command することになるが、「係り受け」の関係は、WH1 と Q1、WH2 と Q2 の間にだけあるので、「～と関係付けられている be associated with...」といったことを表わす、index を付与しておく必要がある。

(4)　[WH1…[WH2….Q2]…Q1]

これに加えて、1 つになった音韻句内の基底のアクセントを実現させないこと、また、1 つになった音韻句にアクセントを付与することが必要（間接疑問文(2)(b)の場合）である。釜山方言でも、ほぼ同じ現象が起こる。この現象を「音の係り結び」と呼ぶ。

これらの現象には、統語論のあとで働く音韻過程が一般的にそうであるように、例外がない。本論文では、主文と従属文に共に疑問詞がある場合や、多重疑問詞疑問文の場合など、構造的に複雑な場合にも、いくつかの一般言語学的に見てあり得る仮定をすることで、一般化が可能であることを示す。問い返し疑問文も扱う。また章末で、日本語標準語における「音の係り結び」を見る。まず、疑問詞からそのスコープの終わりまでが、アクセント減衰の範囲となることを示す（1 つの音韻句にはならないが、高いピッチの部分が次第に低くなってゆく）。また、疑問詞と「モ」の間が 1 つの音韻句になり、高く平らなピッチが広がる現象を見る。これらの音調現象が、福岡方言や釜山方言の「音の係り結び」と深く関連していることを示す。

第 3 章では、まず、ハルハ・モンゴル語の繰り返し構造（reduplication）を記述する。これは、*kubo*＜久保＞ → *kubo* ***m****ubo*＜久保とか＞のように、単語を繰り返して、繰り返し部分の冒頭の子音を *m* にするという現象である。本論文では、この現象が名詞だけではなく、動詞にも起こることを指摘すると共に、[[A [B C]]のような 2 つ以上の構成素からなる連続にこの現象

が起こる場合も、最後の構成素 C だけが繰り返されることを示す。この最後の構成素だけが繰り返される現象は、「音韻論的複合語化」と考えられる。この現象も、統語論のあとで起こる現象であり、例外はない。第 3 章では次に、日本語標準語の繰り返し構造を記述する。「バラバラ」「バ1ラバラ」などの擬音語・擬態語や、「ガクセーガ1クセーしている＜いかにも学生らしい＞」「ハクロンハクロン言う1な」などの、日本語の繰り返し構造がもつ音調の規則性を見る。構造によって、同じアクセント・パターンの単なる繰り返しか、複合語アクセントが現われることを指摘した。

第 4 章では、シベ語、満洲語、現代ウイグル語の 3 言語の、動詞語幹が関係する音韻現象を記述した。シベ語では、[Dorsal, -high] の素性をもつ母音（a, o）と子音（q, ɢ, χ）が trigger となって、動詞語幹に隣接する完了接辞等まで [-high] の調和が及ぶことを示した。満洲語では、母音調和が、動詞語幹に隣接する未完了および完了形態素までしか及ばないことを示した。現代ウイグル語では、側面音の異化が、動詞語幹に隣接する受身・再帰形態素までを範囲として起こることを示した。この 3 言語における母音/子音調和および異化には、例外が見られる。これらの例外については、レキシコン（心的辞書）に記載されている個々の動詞語幹についての情報が、統語論のあと、動詞語幹にアスペクト、ボイスなどの接辞が隣接する際に、参照されるものと考えられる。

第 5 章では、アクセントの中和の諸相を示し、また音韻領域の諸相につい

て、まとめを行なった。また、局所的な音韻現象の例として、日本語標準語の名前（姓と名のうち、名のほう）のアクセントに関わる現象を示した。音韻論的な条件で異形態の交替（アクセントの交替）が起こる現象である。

以上のように本論文では、統語論のあとで起こる音韻現象について、種々の音韻領域の違いによる、4つの類型を見る：

(5) a. 音韻句や音韻語などの韻律範疇が関わる現象

b. 繰り返し構造などの複合語化が関わる現象

c. 異形態の実現に関わって語幹と語尾（接辞）の間で起こる現象

d. 異音や異形態の実現に関わる局所的な現象

また、(5)(c)のような形態論的情報が直接関わる場合には、例外があり得ることを示した。(5)(d)は局所的な現象であるが、(5)(a-c)は、統語論的情報や形態論的情報をもとに形成された音韻領域のまとまり（シンタグマ）を表わす機能をもっているとも言える。